

しかし、又、しとしと降り出した雨の中を屈斜路湖へと急ぐ路々、車中からは果しない原始林が所々に見られ、そのあい間あい間にひっそりと面はゆげに咲いているサビタの花は、私達の旅情をなぐさめてくれる。

屈斜路湖で下車し、湖のほとりを歩いている時、なぜかしら現実とかけ離れた感傷にさそわれ、湖の中にすい込まれそうに感じた。水の中では寒さを感じないのか、カーディガンを引っかけ歩いている私達と対象的に、湖で泳いでいる人を見受ける。

昼食を取りに川湯温泉へと向う。

川湯を発つて間もなく、巨大な岩山が見えて来た。かすかな硫黄の臭と共に、もうもうと立ちこめる煙がはつきり目に入つて来る。下車した時には強い硫黄のにおいに一瞬息苦しく感じたほどである。その名の如く、硫黄におおわれた硫黄の山。山の途中まで登つて、臭の強さに耐えられず、引返してしまう。

硫黄山を後に、又、山に登るに従つて霧が深くなつて行く。

" 神秘の湖 " 摩周湖はついに湖面を表わさず、私達をがっかりさせた。あきらめ切れぬ想いの私達は、明朝晴れることを祈りつつ宿へ向つた。宿で入れてくれた火鉢のまわりにまるく陣どり、暖つたかいお茶を飲む。それが真夏の八月にもかかわらず不思議と自然に感じられた。

釧路から札幌まで

短食二の二 大浦多恵子

8月8日 朝はやく、宿の後の釧路川に行つてみた。とりはだがたつ程の涼しさだつた。真夏の京都では想像も出来ない。

今朝も又くもり。摩周湖は今日も朝から霧のベールの中に、神秘的なその姿をかくしているとのこと、何よりの心残りだつた。

9時に宿を出て、47.7曲り。スリルと移り変わるめずらしい景色を心ゆくまで楽しみながら、2キロのドライブコースを阿寒へと急ぐ。途中のくちはてた木の枝にからむサルオガセに奇異を感じた。箱根の溪谷を思わせる絶壁にヒヤヒヤしたり、ホツとしたり、思わ

ず出る ハコネノヤマハ テンカノケン は、期せずして、大合唱となる。

阿寒最初の展望台、双岳台からは雄大な雄阿寒岳をまのあたりにのぞみ、昨日来のくやしさも少々うすらいだようだ。しかし雌阿寒岳の後にひっそりと、その姿を、かくしていた。女らしく……………。

このあたりの道路には、直径1メートル以上もある大フキの群落がある。人の立姿よりも背の高いものもあるとか、雄大な北海道にふさわしい植物だ。

双湖台に下車し、パンケトー、パンケトーの両湖を望む。先來よりたちこめていた霧がさつと流れて、紺壁の湖面と、それを囲む原始林が目にあざやかである。そこには、今なお、熊、鹿が棲息しているとか。

双湖台にわかれをつけ、アイヌとマリモの伝説の湖である阿寒湖を遊覧船で湖上遊覧する。待望のマリモは、赤茶けて岸辺のさざ波にゆらいでいた。青緑色のビロードの様な、やわらかく美しいものを想像していた私達には、又々期待はずれ。しかし、雌阿寒岳がその美しい姿をくつきりと現わして私達を歓迎してくれたのが印象的だつた。昼食を済し、阿寒の町をぶらつくと、いたる所でアイヌ人が熊を彫刻しているのが目についた。ペンダントだけを小さな板の上に並べてあきないをしていた一人のアイヌ人の帽子に、京女のバッチが飾られていた。それだけで親しさとなつかしさをその店で感じ、ペンダントを求めずにはおれなかつた。アイヌの男性のたくましまと、手先の細かさにちぐはぐな魅力を感じた。

バスで釧路駅へ向う。さすがにくたくただ。ガイド嬢の歌も子守り歌。自然とコツクリ、コツクリ ネンネンコロリ。

釧路市街に入ると、本州や九州では見ようとして見られない広々とした平野が開けてきた。手前の釧路平野は見渡す限りの平原で、馬に乗ったカーボーイでも出て来そうな錯覚を起す。そこにさきみだれる名もない小さな草花の生命力の強さと尊さが胸をさす。この当りの土地は、1坪3円也とか？

釧路の町で2時間も自由時間があつた。晩歌の町、釧路をぶらつくことにした。時間をもてあまし、喫茶店に入った。旅の食事の、野菜不足に悩んでいた私達は、急にキュウリをバクつきたくなり、八百屋でそれを求め、喫茶店で洗ってもらい、がりがりとかじる。野菜不足になりがちな旅行で、やつと気が落ちついた。いかにも食物科にふさわしい行為と目負しているが？ その時の給仕さんのポカンとした顔を今でも思い出してはなつかしんでいる。

7時40分。釧路発の列車でアカシヤの町札幌へ。夜の食事は、ちらしずし（カニ・しようが・卵・しいたけ）。

夜行の疲れもみせず、朝6時30分札幌に着く。すぐ様バスに乗車し朝食をとりに豪華なサンドイッチ・牛乳・スイカに満足し、ホテルの前の時計台を見る。

「この道は、いつか来た道

あゝ そうだよ ほら 白い時計台だよ」

この日も朝から小雨。よくよく雨に見込まれたらしい。

北大の構内に入り、その規模の大きさにびつくりする。一面の緑の芝生、がつしりとした大木にかこまれた北大の学生に羨望を感じずにはおれなかつた。ポプラ並木も、雨と、大勢の人の為、ロマンテイクにこそなれなかつたが、やはり印象に残る思い出の一つである。

バスは札幌の町を走り、雪印乳業の見学。本当は途中通過した札幌ビール工場の見学を望んでいたのだが、そこは素通り。残念／ アカシヤ並木をバスで通り羊ヶ丘展望台へ。

晴れた日には、羊が群をなして、草をはんでいる姿が見られる羊ヶ丘であるが、この日は朝からの雨の為一頭の羊もそのやさしい姿を見せておらず、ただ青々とした草のみが一行を迎えてくれた。仕方なく牧草だけを背景に記念撮影する。

札幌より京都へ

短食二の二 西 居 一 枝

北の都札幌市内を見学して、又私達一行は登別温泉へと向かった。途中、全く北海道ならではのと思われる大工業あり、大牧場あり。この世は「天国じや」と云いたげな牛、馬の間を真直ぐに走る国道をつつばしる。しかし私達はこの雄大な景色も7日目ともなると少少あいてきて、一同コツクリコツクリとやり始める。遂には二号車、先生を初めとして全滅、目をあいてきばつているものはほんの数人となり、人の眠顔を見わたして見わたして喜んでいる。

バスが少し小高い所へ来て止つたので、一同おどろいてバスをおりるとすごい広い所で羊ヶ丘と云い、普通天氣の良い時は羊がいるとか、残念ながら誰がお精進が悪いのか、ここ2、3日曇っている。しかしこれ又すばらしくずつと果ての方まで見わたせ、視界をさまたげる物等一つもない。全く北海道である。

又北海道のアイヌ部落白老コタンにも行く。ここは、純粹のアイヌ人が少なくなつたと